

橿形山<春夏秋冬>冬篇 2024 (会山行)

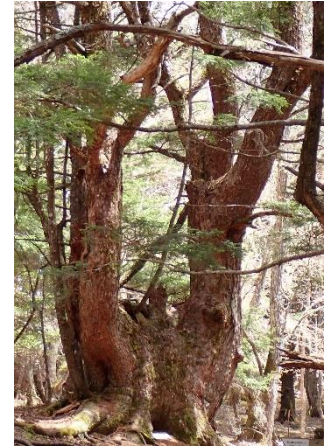
(報告) TM

◎期日：2024年2月11日(日)

◎メンバー：TM(L)、IK、KM、SM、FJ、FY

2022年から、山梨県の南アルプス前衛の山「橿形山」(標高2052m)を、季節を変えて何度も訪れるという企画を、会山行として実施させてもらっている。事務局KMさんに背中を押してもらって始まったこのシリーズ、今回は2022年秋(大雨で登山は中止)、2023年の春(というか、むしろ初夏)に続いて3回目となる。

なぜ、交通の便の悪いこの山にこだわっているかには、大きくふたつ理由がある。ひとつには、季節の変化がしっかり感じられる山であること。春のカラマツの新芽、カタクリ、夏のコケと巨木の深い森、秋の紅葉。登山者は多くなく、いつ行っても静かで深い自然が感じられる。もうひとつは、山頂付近の巨大な針葉樹の森の不思議さだ。もちろんまっすぐに生えている針葉樹の方が多いのだが、それらは比較的若い木だ。まだ残っている大木の多くは根元に近いところから何本にも枝分かれしていたり、下向きに太い枝を伸ばしていたり、奇妙な形が、否が応でも目に付く。どうしてこんな姿になったのだろう。伐採後に生えたひこばえか、雪の重みに耐えかねたのか。かなり昔に、そうさせた何かがあるはずだが、ネットで検索する程度ではよくわからない。

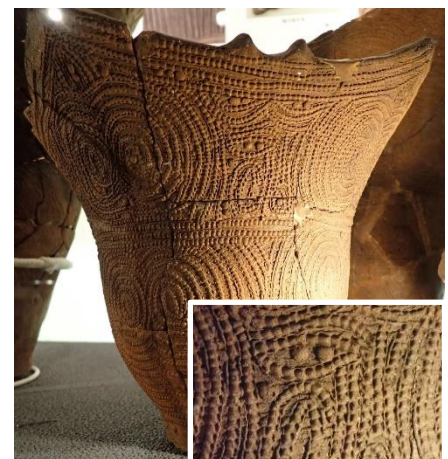


夏の巨樹

ねじ曲がった枝ぶりの謎は、北陸などのように雪の重さが原因なのだろうか。自分の目で見てみたいと、ずっと思っていた。だが、冬山登山に慣れていないうえに、橿形山は大きく、夏でも山頂往復は相当時間がかかる。雪の季節はなおさら。加えて登山口までのアプローチが問題だ。実は2015年2月に南アルプス市の企画で、橿形山スノーシューの日帰りツアーに参加したことがあったのだが、その際、登山口のある県民の森に行くまでの坂道が恐ろしくバリバリに凍っており、これは自分では運転できない、と観念した。誰かを巻き込まないと冬の橿形山は行けないのである。翌年2月も、下見と称して、FTさんと行ってみた。この時は確か、登山道を横切る林道まで登って見たのだと思う。冬なのにクマの足跡らしきものが、登山道の脇になぜかポツンとひとつあったことを憶えている。

2024年冬は、満を持して3回目、山頂まで登る計画を実行することとなった。

登山前日の2月10日、参加者6名は2台の車に分乗し、11時に中央道の釈迦堂PAで待ち合わせ、食堂で昼食をとる。その足で、甲府南ICの正面にある風土記の丘・曾根丘陵公園に向かい、公園内の山梨県立考古博物館で縄文時代以降の遺物を見学した。2022年秋の1回目に、たまたま大雨で南アルプス市のふるさと文化伝承館に寄ったのがきっかけで、縄文文化に触れるのがすっかりおなじみとなった。山梨県は黒曜石の取れた長野県に隣接して縄文文化が発達し、多くの遺跡・遺物が発掘されている。今回見た土器の文様も



どうやってこんな文様を？



古墳時代の取っ手付き碗

驚愕の熟練の技で、当時土器づくりの専門家がいたことは間違いない。古墳時代まで下ると、今でも通用する美や実用を兼ね備えた器があり、ご先祖たちの技術には舌を巻くばかりだ。

見学後は公園内にある、東日本最大級の前方後円墳「甲斐銚子塚古墳」を始めとした古墳群に登って、甲府盆地の眺望と周囲の山岳の眺望を楽しんだ。この日は天気が良く、南アルプス

は南の塩見から甲斐駒まで、ハヶ岳とニセヤツも青空に映えてくっきりと見え、非常に美しかった。翌日登る楯形山は、白根三山の前に黒くどっしりと構えている。KMさんから、次回はお弁当を持参してこの古墳の丘から景色を楽しみながらランチしましょうとご提案いただいた。是非そうしましょう。

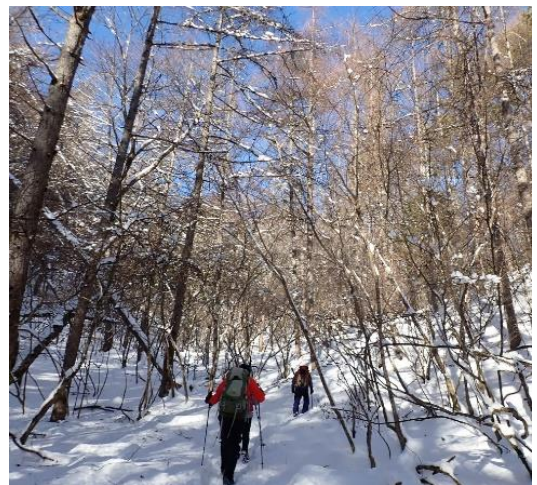
写真を撮ったら、途中で買い物をして今晚お世話になる「樹園」に到着。温泉にゆっくり浸かってから懇親会タイム。そして夕食をいただいて早々に就寝した。

翌朝は6時に宿を出発。県民の森の駐車場に車を止め、中尾根登山道から山頂をピストンする計画だ。心配したアプローチは除雪してあり、スタッドレスの車で問題なく登り切った。7時過ぎ登山開始。直近のYAMAPの登山記録では、雪は登山道の途中からという記録だったが、私たちは雪の直後だったため、道は最初から白く覆われており、途中から軽アイゼンまたはチェーンスパイクを付けて登った。ただしKMさんだけは、さすが、最後まで靴オンリーで通した。

思ったほど雪は深くなく、雪質も良かったものの、登山道自体の傾斜と距離の長さも相まって、それなりにパワーが要

る。登山口の標高も890mですぐに1000mを超えるためか、息が切れしんどい。登山道を横切る林道まで行けば、標高約1900mのほこら避難小屋までの半分を越えたことになるが、なかなか見えない。雪道は夏と違ってゆっくりとしか進めないことを実感する。途中少しずつ休みながら、ようやく林道到着、標高約1450m。休憩しながら、SMさんが、ここから皆と離れゆっくり登り、適当なところで引き返すと言う。駐車場に戻ったら、人のいる施設があるので、暖かいところで待ってもらおうとお伝えし、5名は先を急ぐこととなった。

登山道は少しずつ雪が増えるものの、ピッケルを刺してもせいぜい30cm程度。途中でIKさんも下山することとなり、休憩しながらこの後どうするか話し合っていた。FJさんが誰か来たのに気づき、なんとなく皆で見えていたら「あ、SMさんだ！」ほんの少しの遅れで、SMさんが追い付いた。にわかに活気づく。「さっきの林道で飴をなめたら、力が出て行けそうな気がして」とニコニコと仰る。さすがだ！と皆、笑顔で褒め称えた。全員で写真を撮る。お二人はここで下山し、そのまま先に東京にお帰りになることとなった。下山組、登頂組それぞれ行動再開する。



新雪の登山道



登頂組は淡々と登り続ける。FYさんが「いい天気だ。風がない」と言うと、KMさんが「うん、風がない」と答える。こんなこだまが何度も行き交った。標高1700mを超えると、木立の切れ目から富士山が見えた。肩のあたりに雲をまとい、陽を浴びてなんだか気持ちよさそうだ。1800mを過ぎたあたりから、特徴のあるカラマツの大木がちらほらと姿を現し始め、間もなく辺りが平らに開けた。青空を背景に、背の高い木が取り囲む雪原。

真ん中に登山者の歩いた1本道ができています。その周りにシカのトレースが多数。遂にほこらキャンプ場に着いたのだ。

誰かが雪で見づらくなったりボンの代わりに、小さな旗を立ててくれている。木々の枝に乗った雪はそれほど多くない。だが青空に枝の雪が映えて、本当に美しい。ここの避難小屋の前で約30分休憩した。避難小屋の中には宿泊者が2人。前日小屋に泊まって、朝、山頂アタックして戻って



ほこらキャンプ場に到着

来たそうだ。大きな荷物を背負って下山しようとする方に「夜は寒かったですでしょう？」と尋ねると「すごく寒かったです。中でテントを張りました」と教えてくれた。

腹ごしらえして、使わない荷物はKMさんのツェルトにまとめ、避難小屋の前の木にデポした。身軽になったところで、疲れた気分をわくわくに切り替えて、山頂に向け出発。

とはいうものの、山頂部まで、また急登である。ただもくもくと歩く。どこかでシカが「ピュイ！」と仲間に合図を送っている。20分ほどすると、空は雲に覆われた。普段から、



巨樹を見上げる

楡形山は山頂部だけ雲に覆われていることが多い。そういう山なのだ。そのせいだろう、山頂部



サルオガセはどこ吹く風

はおそらくいつも湿度が高く、サルオガセが大量に枝からぶら下がっている。雪が降ってもサルオガセは枯れることなく薄緑色で、どこ吹く風という具合に平然としている。落ちているサルオガセに触ると、カラカラに乾いていた。

奇妙な形の大木があちらにもこちらにも見えてきた。今回は思ったほどの大雪ではなかったようで、若木の頃に雪の重みで枝が垂れ下がったのかどうかはわからなかった。しかし、おそらく樹齢200年くらいは経ているであろうと思われる巨木の風格は否定しようがなく、その濃い茶色の枝に真っ白な新雪が乗っている



「踊る太陽の塔」

さまは見事だ。息が切れて苦しく、足を取られないように足元ばかり見ているという状況ではあったが、時々顔を上げて周りを見回すようにした。低温のせいかカメラの調子がおかしく、写真を何枚か取り損ねた。

山頂に向かう途中、下山する 10 名以上の団体とすれ違った。列の最後にいらした方に KM さんが話しかけると、都岳連の「山の会フレスコ」の皆さんだった。フレスコの HP に写真とレポートが出ているので、興味のある方はそちらもご覧ください。

山頂部のいくつかの分岐の辺りまで来ると、比較的緩やかなところも出てくる。あとどれくらいだろうなどと思いながら歩いていると、前掛け風の布をまとった全身真っ黒なウェアの青年が、後ろから音もなく近づいてきて、人懐こい感じで二言三言言葉を交わし、軽々とした足取りで追い抜いていった。「なんだかエプロン

着けてたね」「あれ、なんだろうね」「山頂にレストランがあったりして」。宮沢賢治じゃあるまいし。でも不思議山櫛形山ならありうる、などと考えているうちに、ついに「櫛形山山頂」の標識の前に出た。件の青年もそこにいた。レストランはなかった。けれど、青年は私たちに干しイモを分けてくれた。地元の南アルプス市で作られた干しイモはとても甘く、疲れた体に沁み渡る。ちなみに、エプロンはポンチョのようなもので、おしゃれに腰に巻いていたというわけだった。



山頂標識

三角点があるのはもっと先の奥仙重という場所だが、往復 40 分もかかる。時間も遅れ気味だし、だいぶ疲れたので、ここまで、で全員一致。とたんに心が軽くなり、山頂の周りを見回す余裕が生まれた。ずっと来たいと思っていた雪の櫛形山山頂に、今いるんだ、という喜びがじわじわと湧いてきた。



「フォークの木」

25 分ほど滞在して、そろそろ下りますか、と荷物を背負う。来て本当に良かった、という思いを胸に下山開始。下りが得意な KM さんを真似しながら歩行する。歩行というよりは、サーッと滑って適度にストップをかけると言う方が正確だ。気づいたのだが、私の装着していたチェーンスパイクはこうした下り方にすこぶる向いている。爪が 1cm 程度と小さく、滑るとほどほどに雪が靴裏に付くのか、スピードがつきすぎない程度に滑って、止まりたいところで止まってくれる。FJ さんは、障害物のない斜面を見つけては、持参のシリセード用ボードで滑り降りてきた。楽しそう。

ほこの避難小屋で荷物を回収。また少し腹ごしらえなどして、13 時半過ぎ、下山の途へ。ほこの神様、ここまで来させてくれて、ありがとう。



この木の根元にほこの神様がいる

キャンプ場の平原を通り過ぎると下り坂だ。最初は早くても 15 時半、下手すると 16 時の下山完了と思っていたのだが、滑っては止まるスタイルだと大幅に時間短縮できるとわかり、15 時頃には下山できるのではないかと全員の意気が上がる。滑って止まって途中の林道に 14:20、駐車場には 15:10 に下山した。上り約 5 時間 20 分、下り約 2 時間 20 分だった。やりたかったことが実現できて、達成感いっぱい！全員でハイタッチして、登山を終えた。



枝だけでこんなに太い

荷物を整理してクルマを出す頃に、ちらりほらりと雪が舞い始めた。楡形山から少し離れると、運転していた FJ さんが、楡形山が雲で見えない、と言う。ええ？と全員でそちらの方向を見ると、ホント、さっきまでいた楡形山は重苦しい雪雲にすっかり覆われて、全く見えなくなっていた。間一髪で雪から逃れたらしい。山頂付近で曇ってきたのは、今日の場合、単にお天気が下り坂だったからだった。

FY さんは電車で帰るとのことで、近くの身延線の駅でお別れ。残りの 3 人はみはらしの丘「みたまの湯」に向かった。甲府盆地をまるまる見下ろせる絶景温泉だ。ちょうど夕暮れ時、暗くなる直前に見渡した甲府盆地は、ところどころ雲に覆われ、その下に雪が降り注いでいるのが見える。楡形山も雲の中。東の東京方面も雪だ。帰りの中央道で徐々に雨に変わり、「こんな天気予報だったっけ？」「わからない。現地の天気しか頭になかった」「同じく」。こんな調子だったが、しっかりとしたスタッドレスタイヤと安全運転に守られて、無事に山梨県を後にした。

今回の山行が実現したのは、同行いただいた皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

《コースタイム》

県民の森駐車場 (7:05) ~ 林道 (9:00-9:05) ~ ほこら (10:45-11:15) ~ 楡形山山頂標識 (12:25-12:50) ~ ほこら (13:20-13:35) ~ 林道 (14:20) ~ 県民の森駐車場 (15:10)

(終)